

## ピエール・ロチ『老人』解説・翻訳

桑 原 隆 行

### 【解 説】

この『老人』という作品は、1884年12月1日の『両世界評論』に発表されて、後の1887年に『追放物語集』に収録された。題名が示すように、この作品では老いと死のテーマが語られている。興味深いのは、作品発表の84年はロチが34歳の年であり、1923年の死の年までまだ40年近くが残されていることだ。若い盛りに死を扱った物語を書くということ言えば、訳者（桑原）は『晩年』という処女作を書いた太宰治を思い浮かべたりする。

しかし、死のテーマは初期から晩年までロチのほとんどの作品に遍在していて、その意味ではその書かれた時期が早くても、何の不思議もないとも言える。

物語は、娘の写真と異国情趣溢れる品々だけを人生の最後の証のように、生につながり止めてくれる維持装置のように保存して、ブルターニュの小村で晩年を送る退役老人の映像的な描写で始まる。

（ロチの異国情味の部屋作りが本格化するのには、作品発表年と同じ1884年からである。その年、最後の間借り人たちが退去して、部屋が明け渡されたのだ。物語の老人の部屋は、ロチの現実と夢想が二重に投影された結果だと推測することができる。）

そして、2から6がすべて、「・・・を思い出す」という文で始まっていて、物語の回想的性格とテーマを印象づける。7から最後の14までは娘の死後の老人の悲しみと退役を待つ悲しみ、海軍勤務の活躍と昇進、退役後の孤独と老衰、死への恐怖と意識、そして死が語られている。

まず、ロチの作品の多くが日記を基に書かれている事情が示すように、作品には彼の現実が色濃く投影されている。ロチの場合、その伝記的な事実と文学作品が相互に照射し合い、読者に両方を読み解く二重の楽しみをもたらす。ロチはその作品と現実が二面の透かし鏡のように重なり、一方だけを切り離して享受することが無意味な作家の典型的で代表的な一人である。さて、そこで『老人』に見てとることができる、ロチに親密なテーマを二重性、二面性、コントラストという面から指摘・紹介しておく。老人は若くして死んだ娘の思い出を同伴して生きる。残された者の人生を支配し規定するかのような死者の強力な思い出の影響力は、ロチの人生を支配し続けた死んだ愛しい女アジャデのそれを連想させる。（『アジャデ』は1879年の出版。）娘の墓に対する老人の過剰な意識は、後年ロチがアジャデの墓探しや墓碑窃取に見せた情熱を予想させる。ロチの作品は過去の思い出の反映であると同時に、彼が将来実現することの予定予感、シュミレーションの産物でもある。

人生の大半を海で過ごし、故郷への思いに突き動かされて帰郷したと思うとすぐにまた海上勤務

に出発せざるを得ない老人。その水兵という身分が彼に内包させてしまう異郷と故郷という二重性、二重のノスタルジーは、ロチ自身が経験したことであると同時に、日々経験していることでもあり経験していくことなのだ。ここにもまた、ロチに特徴的な未来の予想＝回想を見てとることができる。

作品には老人と妻、娘と水夫との二つの恋が描かれている。共に重なり合うかのように悲しい結末を迎える恋。始まったものはいつか終るし、獲得したものはいつか奪い去られる。恋においてもそれは同じであるし、ロチ自身、アジヤデとの恋を通じて歓喜と喪失、出会いと別れを体験している。ロチ作品における恋物語は常に暮色のような悲しみの色を帯びている。

『老人』には、老いと若さがコントラスト鮮やかに表象されていて、時の残酷を読者に印象づける。それは特に二つの場面に象徴されている。一つは老人が退役して兵營を去る夕方の場面。若い水兵たちと恋の快樂を存分に味わい尽くそうと待ちかまえる町娘たちの間を、生と性の熱情とは無縁になった彼は一人淋しく悄然として家路につくのだ。もう一つはルクヴランス門の場面だ。門の近くには何本もの小道がある。この同じ場所が老人と若者では違う目的で利用されている。老人たちにとってそこはそれぞれ勝手に昔話に興じる集合場所、「墓地の広場」のような場所である。若者たちが必要とするのは小道の方だ。人目につかない隠れた場所に通じているので、恋人を連れて散歩したり逢引したり人目を憚る愉しみに耽ることができるのだ。「健康と力に夢中の子供たちのように陽気に」享樂に耽る若者たちの輝かしい生は、老人にとっては「残酷な皮肉」でしかない。

水兵たちの孤独と緊張を和らげ癒してくれるのは酒と女。飲酒と売買春を含む性の問題は、19世紀フランス文学の大きなテーマであるけれど、それはロチ作品の重要なテーマでもある。(性の問題はロチの多くの作品で何らかの形で扱われているし、飲酒の問題は特に『我が兄弟イヴ』の中で支配的な位置を占めている。)『老人』では老人が不意に思い出したかのように性的欲求に捉えられて、プレストの特別な地域、女たちが性を売る場所に出向く話が語られている。(読者の連想は、『ある子供の物語』に運ばれる。その中で記憶の対象にされている水兵たちが酒と女で遊ぶロシュフォールの歡樂街、少年ロチの好奇心を刺激して止まなかった禁断の秘密めいた界限。)老人は性の哀しみを抱いて、恥じるようにそそくさとその場を後にする。その哀しみは、彼が何一つ煩うことなく多くの女たちと性の快樂を堪能してきた過去が思い出され回想されているだけに、一層対照的に読者をも哀しみに誘う。そもそも後半生の彼は、二重の喪失の悲しみ(娘の死と、愛した女たちが消え去ったこと)に蝕まれ、表面上の活力と健康体とは裏腹に心的に衰弱して、死に向かっていたのだ。

最後に夢と記憶の問題——これもまた、ロチの作品に海のように果てしなく広がり、それなくしては彼の物語が成立しえない極めてロチ的なテーマである——に触れておきたい。ロチ作品の夢は登場人物の心理投影、過去想起と未来告知という二重の役割を担っている。さらに、作品そのものが夢のように、ロチ自身の心理投影、過去想起と未来告知の性質を帯びている。夢と現実が曖昧な境界線でつながっていて、それぞれ交換可能であるように見える。老人がカンボジア女を乗せてジャ

ンクを操りインドシナの川を遡る場面がある。その情景は、ロチが1901年に行ったアンコールワット探索行（その顛末詳細は『アンコールワット巡礼』となって1912年に発表された）を連想させずにはいない。ロチの現実はすでに想像し夢見ていたことをなぞるだけなのだ。既視感に支配された人生。

この作品で、記憶に関しては個人レベルを越えた記憶の不思議が言われている。記憶は場合によって、祖先の記憶の蘇り作用として機能していて、祖先の記憶がある個人の記憶を媒介として連綿と伝えられていく神秘。「頭にはほとんど観念がなくなっているにもかかわらず、彼には相変わらず頭がとても重たく感じられた。」老人の記憶は薄れ、その肉体同様衰弱して、空虚化して行く。そして、三月のある夜、死が彼の家に立ち寄るのだ。

（翻訳に用いたテキストは次の通りである。Pierre Loti, *Nouvelles et Récits*, Omnibus, 2000. に所収の *Le Vieux*.)

## 【翻 訳】

### 老 人

老衰の身で、お前は戸口から戸口へと、  
子供や塩水売りたちに、お前の若い頃を  
語りに行くがいい。

G・フロベール『サラムボー』

#### 1

彼が住んでいるのは、ブレストからボルズィック灯台へと向かう道の断崖の中程に建つとても古いちっぽけな家だった。その道沿いの他のよく似た住まいでは、多くの「海軍退役者」が余生を終えるのだ。

彼の家は、ハリエニシダが伸びた花崗岩の壁を背もたれにして、灰色の奥まった停泊地、コルモランディエール岬、そして、船舶がそこを通過してやってくる沖合の入口グレを高所から見つめている。

低い塀の小庭が家を通行人から隔てている。樹液の潤れた老低木を通して、家が暗鬱に岩を支えにうずくまっているのが見えた。絶えず、家は西風、陰気な悪天候、彼岸のにわか雨あるいは冬の長雨に打たれてきたのだ。

そこで一人暮らしをする男は、空が少し晴れると、門の前に座るのだ。灰白色の髭が褐色の顔、

枯木の切り株に斧を大きく振るって削り作られたかのような顔の周りに明るいネックレスを成している。

男はイヤリングをつけ、姿勢はまっすぐだ。骨の髄まで衰弱してはいるけれど、特別な衰え、皆の老いとは違う老いで弱っていることが見て取れた。彼を見て年齢の見当をつけるのは不可能だった。

数少ない散歩者たちに、夕方仕事のあとでプレストから戻る労働者たちに、決して彼は顔を上げない。ただし、ブルーカラー、水夫の姿が通り過ぎるときは興味を感じるみたいだった。見ようと前に進み出て、体を左右に振る、くつろいだその姿が、海の灰色の遙か遠くを背景にくっきり輪郭を描いて遠ざかっていくのを目で追うのだった。

プレストとボルズィックの二つの方に、道は登りになって遠ざかり、停泊地と空の霧のたちこめた空間に向かって急に終わるように見える。通行人が一方の端から不意に現われて、沈み込むみたいにもう一方の端から消えていく。周囲にあるのは花崗岩の塊、ヒースとサンザシ。そこでは、大きな街の入口であれ、ブルターニュ地方の何かしら厳しく憂愁な雰囲気が感じられ始めるのだった。

夏、本当に晴天の日は、彼は小庭に、赤い尾羽根のガボン産の灰色のオウムを持ちだす。オウムの止まり木は島々の木でできていて、餌壺にはココヤシの半分が使われている。彼は、今にも倒れそうな姿勢で止まり木で寡黙なままでいるこの老鳥に大いに心遣いを示すのだった。

もし、偶然、少し暑くなると、どちらも共に生き返るみたいだった。オウムは話しだす。相変わらず動かないまま、腹話術師の声で船上の罵り言葉を繰り返すのだ。男はまるで熱帯地方にいたかのように、アデンの壺で水を冷やし、中国仕立ての南京木綿の短マントを着て、棕櫚の葉で自分を扇ぐ。

窓が開いていると、樹木みたいなクワガタソウの枝を通して、よく気を配る女性の手で片付けられたのと同じくらい片付いて、清潔なこの孤独な男の家の一隅が見えた。暖炉の上には二つの花瓶、二つの陶器人形、貝殻や様々な異国の品が置かれてあった。

六月と七月は、ほのかな斜光が夕方頃にひそかに入ってきて、そこにそれらの品々を見つけ出して長居するかのようだ。

それから、これらの短い夏の憂愁の後に、陰鬱な霧が戻ってきて、何か月もの長い間、すべてを包み込み、すべてを暗くする。

ずっと前からその付近に住む人たちは、十年前にその老人がやってきたのを見たことを覚えていた。目は当時はまだそれほど生彩を失ってはいなかったし、ネックレス状の髭ももう少し黒かったけれど、彼はすでに盛りが過ぎた男だった。一人で住みつき、まだまだ長い人生にそなえるかのよう、利己的なほど入念にすべてを整えた。

しかし、彼は年々、季節ごとに、弱っていった。その悲しい目は生き生きした表情をすっかり失った余り、ほとんど恐ろしいほどだった。残っているのはあのまっすぐな身長で、それで亡霊のような歩き方になるのだった。彼の動きはゆっくりで、こわばっていて、大きなミイラのようにぎこちなかった。

2

彼は若かったころを思い出す・・・

その時は実際に存在したのだ。時々、その時代の漠然としたイメージが甦り、生気のない目を大きく膨らませる。

しかし、それらを再びとらえようとする意識が緊張する余り、すぐにイメージは逃げ去り消えてしまう。そして、この古びた記憶の努力の後に、彼の疲れきった頭の中には、苦痛の肉体的な印象のようなものが残される。

同様に、目覚めの時、夜に見た夢から漏れたイメージを突然思い出して驚く。そのイメージを固定し、他のイメージに結びつけて、とても奇妙な魅力を持っているはずの続きを再構成しようとする。けれども、逆に、それは捉えられずに素早く消え去り、頭には空虚が、一種の不思議な黒い穴が残される。

3

彼はハンサムで敏捷で強かったことを思い出す・・・

ああ、彼の力を今、誰が返してくれるだろうか？ 彼の水夫の腕、固い腕は緊張すると大理石のように硬く膨らんだ。その力ですべてを打ち砕くことができた腕。揺れて、激しく動く帆柱で鉄鉤のようにしっかり掴み抵抗した腕！・・・

今では、その腕も椅子一つ持ち上げることにさえ苦勞し、震える。腕は、凹んだ大箱のような肉体の両脇から、だらんと垂れていて、無くなった筋肉の代わりに、血管だけが死骸の手足を這う青い長い虫のように交差していた。

水兵学校の帆装船が西風に全ての帆を広げて停泊地をジグザグ帆走していると、彼はガラス窓の後ろに控えて船が通りすぎるのを見るのだった。粗いキャンバス地の作業着を着たあの海の少年たちは、索具の中に白点のように高く散らばり、銀の呼び子の音で駆け回り、細い糸に沿って空中を走り、若い猿のように足と手で走り回る。

彼らを見つめる彼には、その彼らの横溢する新しい生命力、彼らをそれほどまでに走らせるその陶醉したような動きのことはもはや皆目分らない。分からなかった。しかし彼自身の少年時代もまた、この停泊地でこの健康で厳しい仕事をすることで発達したのだ。それで彼らを長い間見つめ、見ていると憂愁な印象を——もはやほとんど形のない印象を覚えるのだ、それほどそれらの印象は弱まり、はるか昔のこと・・・

4

彼は恋人たちがいたことを思い出す・・・

それは、彼の目が黒い睫毛の間で素早く動き、若く男らしい炎、威圧的な輝きを左右に投げかけ

た時代だった。

彼は待たれ、懇願され、跪いて望まれたのだ。恋人たちは彼の唇の口づけでうっとり溜め息をもらした。——今や、壊血病と海の湿気で唇は触まれ荒廃してしまった。娘たちが口づけた彼の白い綺麗な歯は、あの黄ばんだ不ぞろいの象牙と成り果て、その間に土のパイプが丸い穴を作っている。

女たち、日焼けした女たち、黒人の女たち、ブロンドの三つ編みの白人の女たち・・・彼は時々記憶の中で、一人の女の顔、もう一人の愛の言葉や柔らかな肉体を思い出す。彼女たちは、余りに遠い彼方のプリズムによって送り返されたピントの合わない漠然とした幽霊の姿のようにゆっくりと再び通り過ぎる。彼は女たちをもう懐かしむことさえなく、今日出し惜しむことに熱心なあの生気がかつては彼女らにふんだんに与えることができたことにただ驚く。

恋。包み込む欲望の眼差し、口づけられるために差し出される唇、人間たちをして互いに求め、抱擁させる永遠の魅惑。これらはすべて終り、消えうせた。彼はもう、そのことを理解することさえなかった。理解するには、今、彼には何かが欠けていた。彼には甘美な神秘の鍵が永久に失われてしまったのだ・・・

そして、彼の気掛かりは今夜の食べ物のこと。冷たい寝床に早くに横たわる前に、小さなランプの明かりで一人用意しなければいけない簡単な夕食のこと。

## 5

彼は妻がいたことを思い出す・・・それはちょうどひと春続いたのだった。四月の夕べ、二人の住まいの誠実な静けさの中で交わした口づけ。

水兵にしてはほとんど少し高齢——三十一歳——で彼は、その若い娘とポール＝ルイで結婚したのだった。

ロリアンで行列、ヴァイオリン、続きがあった・・・

先ず、彼は彼女を自分一人だけのものにする驚きを味わった。私の妻と言えることに、腕を組んで彼女を日中散歩させることに、彼が遠征の貯金でこしらえた自分たちの小さな家に夕方、彼女と帰ってくることに喜びを見つけた。水兵仲間の二、三人が彼と同じようにした。その春は、二回の遠洋航海の間に既婚者遊びを楽しむこともしながら。そして、すでに緑の道で散歩中に会おうとお互い重々しく挨拶しあうのだった。

それから、すぐに何かもっと深遠なものがやって来た。彼は愛情欲求のすべて、見捨てられた可哀想な男の本当の愛の高まりのすべて彼女に注いだ。より清純な愛撫、新たな愛の言葉を想像しながら。ほとんど子供のように再び優しく臆病になって・・・

.....

ある日、ポモヌ号への乗船命令が下った。太平洋をさまよう三年間！・・・

帰港してみると、彼女は街の金持ちの老人と暮らしていて、ごてごてした飾りのワンピースを着ていた・・・

## 6

彼は娘が一人いたのを思い出す・・・

水兵は、ブルターニュの春が美しく、夜が暖かいある年のある五月の夕方、娘を妻から奪い取ったのだ。その思い出に彼はまだほろりとするけれど、それが唯一の思い出だった。

彼の目が、手に蠟燭を持った初めての聖体拝領の肖像写真が入れてある小さな貝殻の額に会うと、また彼は感動に捉えられる。そうすると顔が突然、心を引き裂くような一種の喜劇俳優のしかめ面の中で引きつり、泣いているのだ。ただ二筋の涙が老人の皺だらけの頬に沿って、皺の中を流れ落ちていき、そしてそれだけだった。

彼に追い出された妻は、その二歳のか弱い女の子を残していった。ああ、娘はまさに彼そのもの、彼の額、彼の眼差し、彼の血だった。それで、彼はいつも娘を思い浮かべるのだった、その子供らしい顔を、彼自身の顔に他ならないけれど洗練され、無邪気と若さで活力に満ちて、純な蠟で溶かし直したかのような顔を・・・そうなのだ、人生の十六年間、彼は遠征中、多くのものを我慢してきた。自ら衣服に継ぎを当て、下着を洗ったのだ、その娘のために何でも蓄え帰国の際はより多くのお金があるようにと。娘は虚弱で色白、貴族のお嬢ちゃんみたいだった、それで、とても粗野な彼は、そのことで余計に娘を愛するのだった。彼の信頼する老婦人がポンタヌザンで、手当てをもらって彼女を育ててくれた。帰国すると、彼が再会する娘はいつも少し大きくなっていて、毎回、それはほとんど別の女の子みたいだった。彼は彼女のために不思議な品々を買って持ってきた。陶器、ブラジルの鳥たち、インコ。彼は後にこれまた彼女のために、控除のお金を投資しておいた。プレストでの短い滞在中、彼は娘がちゃんとした服装で、幸せであってほしいと思うのだった。結局、彼女はしなやかな、大柄な若い娘で、その少しゆっくりした歩き方には何か上品な所があった。通りでは彼と腕を組むのだった。彼は一等航海士の制服で、かなり若々しい外見とまっすぐな背丈を保っていて、他の船員たちが翌日、仲間同士で「ケルヴェラに良い恋人ができたぜ」と話しているのを耳にしたり、「ケルヴェラ、お前が恋人、若くて綺麗な子と一緒にいたのを見たぜ」と言われるのが楽しかった。

それで、彼の方は、怒りもせず、にこにここと、「恋人だって？・・・まさか、娘だよ」と答えるのだ。

春の夜が静かで暖かな年の、ある五月の晩、一人の水夫が彼から娘を奪い取ったのだ。甲板員の二十三歳の男が。娘はある結婚パーティーで連れていかれた初めての舞踏会で男と知りあったのだった。

男は彼女を口説き始めた、そしてある晩、彼女を見張るお人よしの老婆が二人を一緒に外出させてしまった。彼女は陽気に連れ立って出かけた、彼女はいつも一人で、すくむ気持ちにする見知らぬ人たちと一緒に、いつもとじ込められて醜い顔の老婦人たちと向き合っていて、針仕事で忙しく、もう戻ってくることはないその遠くの父親以外には決して愛されたことも愛撫されたこともなかったのだ。そして今、とても美しい晩、その力強い腕、青のウールのシャツを通して硬い筋肉が動く

のが感じられる腕に凭れて平原を歩きながら、未知の物憂さに少しずつ捉えられた。男は子供っぽい、とても甘美な事を言った——彼女にとってはとても誠実で、丁寧な様子で。男はブロンズ色の首をのけぞらせて、朗らかな明るい笑いを笑うのだ、——それが開放的な心を持つ人たちの笑いなのだ、——そして、奥まで均一に並んだまったく同じような白い歯を見せながら・・・それから、彼ら二人は共に、誰も通らない道端、五月の植物が新しく爽やかに繁茂した上に座った。空気中の気怠くなるような暖かさ、サンザシの匂い。亜麻色の不動の停泊地が、ぼんやりとかすむ棚引く光とともに夜の中に消えていくのが見えた。

可哀想な孤独な娘！・・・水夫もまた、少しずつ、あの物憂さに捉えられるのを感じた、——しかし、それは男の方では熟知しているものであったけれど。あらかじめじっくり考えていたわけでも望んでいたわけでもないのに、彼は静寂の中で、本当に若い娘の心地よさと同時に少ししゃがれたその小声を聞きながら、きっと蔓植物のように絡まり、触れると象牙のように滑らかな、その揺れる柔らかな形が彼の体に凭れるのを感じながら、自然にうっとりした。一瞬、男は最早、脈絡も意味もない漠然としたことを言ってみたりする、——そして彼女は、男の船フロール号の名前がまだ金文字で輝くそのラシャ帽のリボン、身を屈めてすぐ近くで見たのだった。水夫のその微笑みがほとんど唇に触れなばかりに感じたし、その頬と黒い髭が自分に軽く触れるのを感じたのだ。男は、すごく寒いかにように、震えた。それで、娘の方もぐったりとして、全身で震えながら、彼の中に溶けてしまいたい欲求のようなものを感じ、未知の物事に関して知っている僅かの知識で分かったのだ、自分が墮落することになるということが・・・もし、これほど優しくハンサムな彼に身を任せることが墮落することだとすれば。それで、彼女は逃げたり、身を守ったりせずに、彼の褐色の首に両腕を巻き付け、力強く若い人間の匂いを放つ彼の体にうっとりとして体を押しつけた・・・それから、夜になり、二人を包んだ。

十カ月後くらい、ある冬の日、ジャン・ケルヴェラは四回目の中国遠征から、ブレストに戻った。皆の中で一番に下船し、一番にブルターニュの地に飛び降りて、彼はポンタヌゼン通りに向かって急いだ、あらゆる帆の下に一隻の船を描いた絵で飾られた彼の袋に入れた娘へのお土産を肩にかかえて。

しかし、そこ、彼がいとも陽気に戻ろうとしていたその家の門の前では、彼の子供の監視役の老女がその場で彼を、不気味な顔で縮み上らせた。彼を見て啞然として、口ごもりながら、老女はしがみついて彼を引き止めようとした。

えっ！何があった？ 娘が死んだのか？ 彼は心臓の真中に突然、激しい衝撃を覚えた。——いいえ、そうじゃないのです。——それじゃ重い病気なのか？——多分、そう。いや違います、それだけではないのです。——それでは、一体どうしたのだ？ 彼は老女の腕を揺さぶり、早く言えと命じるが、一方、老女は戸口で茫然と相変わらず彼の行く手を遮るのだ。一体、娘はどこなのだ？ 上の、寝室か？ 娘をどこに置いた？・・・

いそいそとした女、親切な年配婦人めかして他の女たちが降りてきた、彼を見てああ、なんということかしらと言ひ、お喋り女の謎めいた顔をしながら。ああ！…彼には分かった、ひらめき、己



の不幸が直感できた、それで不意に言葉を言った。——まさに、そうだったのか。

それで、素早く駆け上がった、けれども震える脚で。そして、恥辱で顔が熱くなるのを感じ、その階段の一段ごとにブルターニュ人の彼の頭で、恐ろしいほどに悲痛な怒りが募るのを感じながら。

しかし、娘がその惨めな小さなベッドで、ひどく青ざめ、迫りくる死によって鼻孔がすでに締め付けられているのを見たとき、彼はもう何も言えなかった。彼女が彼を怯えた懇願する目でじっと見つめるのを前にして、ただ、彼は泣いた。

小声で、恥ずかしさゆえに遠回しに、彼はその場にいた女たちに問い合わせた。それで、彼の怒りは次々に収まった。娘に結婚の約束をしたのはフロール号の一人で、名前はピエール・ダニエル、甲板員だという。

最初は、相手が街の軽薄な男——金目当ての男ではないかと心配だった。甲板員なら好きだし、そのフロール号が帰港したら二人を結婚させてやろう。

実際、そのピエール・ダニエルは優しい男だった。確かに知っていたら、予想していたら、その娘も、兵曹で彼のような操船手である父親をも悲しませないために戻って彼女と結婚していただろう。しかし、フロール号はとても遠くにいて、彼、可哀想な青年にそのことを言いに来てくれる人は誰もいなかった。そして、ある給料支払い日に、ペルーで、彼は脱走してしまったのだ。

その晩、彼女は水夫の子供を産み落として亡くなったのだが、子供の方はちゃんと生きようとした。

ジャン・ケルヴェラは大変な高給金で乳母を雇った、——その乳母は心ならずも酒飲み女の有害な乳を与えて、間もなく同様にその無垢な赤ん坊を死なせてしまった。

贈り物は、三ヶ月間待ち夢見たあの帰宅の幸福感とともにあのキャンバス地の袋の中に残されたままになった。

そして、その日が、その酷い日が彼の人生の中で、すべてを断ち切り、以前のすべての物事を以後に起こった物事から隔てる大きな刃の一撃のようなものになった。長い間、とても長い間、その場面は彼の記憶、夢、残酷な目覚めの中で生々しく、胸を引き裂くみたいのままだった。

それも今では、他のこと同様忘れられた。多くの年月が、墓の上にゆっくり積み重なる土の層のように、その上を過ぎて行ったのだ……

聖体拝領する娘の肖像写真は貝殻の額の中で少しずつ黄ばみ、何度もの冬の湿気ではがれかかっていた。肖像写真は写真の黎明期にさかのぼる。それでもとても可愛らしい彼女は、まるで打たれるのを怖がるかのように蠟燭を持つ、しょげかえった可哀想な小猿のようだった。彼は何回も写真を複製させて、いくつもの船に乗って一緒に持ち歩いた。こんな風に額に入れられたプリントが最後の、一番鮮明な写真だった。そして、やはり、それはまだ彼女にそっくりなのだ。今では下絵よりも漠然としたそのおかしな、ちっちゃな人形、二個の黄色の斑点が目になっている人形には、何かしら彼女から発散する破壊しがたいものが残っていた、——地上に残存する死んだ少女のすべてのものが。

彼女が墓地に埋葬されて間もなく二十年になる、それで、この老人の頭の中だけに残った彼女の

思い出はすでに消え始めていた。

彼は、とても長い間聖なる形見だった娘のその肖像写真を見ることが、めっきり少なくなっていた。彼がそれ以上に不安に思っているのは、彼のやせ細った脚元にときどき現れ始めた何か、死人のむくみにそっくりの嫌なふくらみだった。

## 7

土中に娘を横たえた後ほとんどすぐに再び出発しなければ、娘が灰色の十字架の下で眠り込んだばかりのブルターニュ地方を、また何年間も離れなければならなかったのだ。

その時の彼は、人生の目的もなく、どこかに戻りたいという何の願望もなく、海を航行するあの男たちの一人になった。彼の命令と警笛は新たな響き、そっけなく陰鬱な響きを帯びた。夜も昼も、彼が忙しいのは帆や索具のことだけで、甲板員たちがちゃんと仕事をしたときも満足の言葉をかけるでもなく、手厳しく彼らを使うのだった。夜も決して歌うことはなく、絶えずくじけることなく見張りに当たるのだった。

香港から一度、彼はかつて娘を子守りしてくれたその同じ女に多額の金を送ったことがある。それは、娘が埋葬されたブルターニュのその小さな一区画の地面を永代購入して、そこに大理石で覆い尽くした一基の墓石を設置させるためだった。手紙にはそれに関して、海での夜の間長々と考えた複雑な指示が書かれてあった。

彼がプレストに戻ってみると、その女は愚鈍な乞食に成り果て、金を受け取ったことなどもう覚えていなかった。突然飲酒を始めた女は、友人たちと居酒屋でそのお金を浪費してしまったのだ。一方、彼、五年間の航海と冒険の間、焼き尽くすような熱い太陽の下で彼は、当直時間の間、眠れない夜の間、遠くのブルターニュのもやのかかった空の下にある若い娘のその墓を不可侵のままに保存すること以外内心の関心事はなかったのに。

急いで彼は娘の小さな墓に駆けつけた。そこは土が最近掘り返されて、見知らぬ老人の名前のある新しい十字架が立てられてあった。納骨堂の段の上、花瓶や花の無惨な他の残骸の間、彼が死んだ子供に与えた最後の贈り物が再び見えた。中央に碑銘のある真珠の冠と一本のパンジー……

さあ、もう駄目だ。娘は他の物たちに混ぜられてしまった……

そして、日が暮れると、彼は一人その墓地から戻って来た。

## 8

何年もが、さらに何年もがその上を過ぎて行った。

彼の遠征、疲労、見張りや苦痛や快樂の夜が互いに、世界のあらゆる土地で積み重なり続けた。ガボンでは日射病、セネガルでは黄熱病、コーチシナでは赤痢になった。そして、座礁と難破。そして、負傷、切り傷と熱病。

一人の提督——彼の老いた記憶にまだ、しばしば現れるのだけれど——その提督に彼は高く評価してもらえた、それで、彼に野心が生まれた。

アフリカ遠征の間、彼は、自らの体で覆い守ろうと感嘆すべき動きで、ある将校の前に飛び出して自発的に胸の真ん中に銃弾を受けたことにより、勲章を授けられた。

最後は、兵曹長に、水兵たちが到達する最高の、大分割の良い名誉ある位に任命された。

そして、そこに至るために彼が費やした年月、気力、用心、精力、声、筋肉と、銀の呼子に吹き込んだ息についてはどう言ったらいいだろう！・・・

しかしながら、彼はまだ女たちに無視されてはいなかった。男前の外見と決然たる様子を失わずにいたからだ。時が経つにつれて、彼は水兵の辛辣な陽気さを取り戻した。少しずつ、習慣的に極端な状況に置かれていることで驚くべき闊達を与えられる大航海者のあの種の気質が生まれて来た。彼は何にも決して狼狽することはなく、簡潔な即答ですべてに決着をつけるのだけれど、それには奇妙にも、海の現実から借りたイメージが混じるのだった。

彼はまだ女たちに無視されてはいなかったけれど、海軍で老いぼれ船員についても老いぼれ船についても言われるように——すり切れていた。

最早、何ものにも止められない水兵たちの内にこもった深刻な衰弱。あらゆる風とあらゆる太陽で彼らはそうは見えないままに抜け殻にされ、ある日突然倒れる。そうして、何事も結局は報いがくるのだ。彼らのとてもたくましい腕を作った過剰な筋肉労働、風土の絶えざる変化、精気と命の浪費、交互に経験する海での監禁状態と、太陽を浴びて花開いたつまらない女たちに身も心もどっぷり溺れる快樂の時期。そして、波しぶきと雨の中での長い当直の夜。そして、精神の緊張状態と、悪天候の中での責任遂行と、不安な時間・・・

ボタン穴に赤い略綬をつけて、兵曹長の軍服姿でまだ背をそらし、立派な態度でプレストの師団に退役を待ちにやってきたとき、ジャン・ケルヴェラは、これらすべての事すでに、とても衰弱していたのだ。

そして、その時なのだ、彼が停泊地と船舶を目の前にそこで余生を終えるためにポルズイク街道の小家を買ったのは。

## 9

彼の退役の日は他のすべての日と同じような日だった。人々も物も、永遠に立ち去り行くこの老僕に大して注意を払っていないみたいだった。

何かしら船舶の匂いと粗野を帯びた師団のあの大部屋での、夜明け前の起床準備のいつもの時間に、裸の水兵たちは鉄棒に列をなして掛けられたハンモックから飛び降りてしまっていた。彼だけが目を覚ましたときに、これが自分の最後の日なのだ何とも言いようのない気持ちで思いながら、困惑を覚えた。それから、機敏な行き来、朝のあらゆる洗濯、夜明け前に始まるあの生活のあらゆる音がいつものように、太鼓とラッパの音で規則正しく続いていった。前夜、夜間外出許可をもらっ

たり取ったりした連中が興奮の態で、口もとに快樂の味を残して次々に戻ってきた。それから、太陽、秋の少しどんよりした太陽がこれまた定刻に昇った。

昼の正餐の前に、彼ケルヴェラは彼の中隊を閲兵した、——この最後の時のために粹に着用した最新の軍服姿で。何人かの兵曹長が近づいてきて、彼を祝福した。その幸運を手にする水兵はほとんどいないこの期限に到達したのだし、ついに休息して、小庭を持って、そして彼らが言うように年金暮らしをするのだ。——彼が衰弱しきっているのを知って、死に行く誰かに対して見せるあの後悔した様子で、逆に「可哀想なケルヴェラ」と呼ぶ者も何人かいた。それからさよならの言葉、握手だった。彼はとても嬉しく思い、彼らに愉快な事を見つけて言おうと努力した。

彼の回りでは、本物の総司令部、海軍の人たちの母家のようなあの大兵舎のいつもながらの生活が続いていた。

休息時間がやってきた。逃亡するには不向きな滑らかな大きな塀の間で、水兵たちは何人かのグループになって散歩していた、ゆったりとした服を着てがっしりとした体で囚われの子供たちのようなぐったりしたりいらいらしたような様子で。顔が熱帯地方の日に焼けて黒ずんだ本物やベテランの船員たちが煙草を吸いながら、遠征の様々な冒険を語り合い、隣近所の小娘たちに関する色恋の内緒話を交換し合ったり、過剰な体力を体操場の鉄棒で発散していた。それから、漁船とかブルターニュの海岸の村々からやってきたばかりで登録された、丸顔のまだ幼い新兵たちが少し怯えたように、無邪気な目で見つめていた、支給される事になっているあのブルーカラーやベレー帽を待ち遠しい気持ちで待ちながら。古参兵たちは新兵たちに関してあれこれ考えを述べた。そして幾分乱暴に言われる批判に加えて、時々次のような最高の褒め言葉が聞こえてくるのだった。「あいつはまだ人見知りしているけれど、たくましくなるぞ！」

その日はずっと新調の軍服を着て彼はそれらの一団の間を目的もなく行ったり来たりした。それからとても敏捷な若者たちが逃げ出した馬のような音を立てて四段ずつ駆け下りるあのすべての階段を。そして洗った甲板とコールタールの匂いのする、開放したあの大部屋の中を。

そこではいたる場所が彼の人生のすべての時代の思い出だった・・・海軍で四十年間勤務していた時、プレストのその界限はしばしば通った。遠征から戻ると、ポケットをお金でいっぱいにして、しょっちゅう、そこに陽気に戻った。しょっちゅう、そこからまた旅立った、背中に布袋を二個下げて、港に通じる花崗岩の階段を降りて、——また陽気にだったり胸引き裂かれる思いで——、遠くへと未知なる場所へと出かけた。それで、彼はそれらすべての一角をまた見たいと思った。彼にはまた、まったく大遠征前夜の時のように、下士官がいばりくさっている事務局で済ませなければならぬ手続き、仕上げるべき書類、待っている署名があった。とりわけ、動き回り、忙しそうにしたい欲求を、そして、確かな満足にもかかわらず、気を紛らしたい気持ちを感じるのだった。

夕方、兵舎の自室で、彼は初めて胸張り裂ける思いで兵曹長の軍服を脱ぎ、黒い服に身を包んだ。素晴らしかった彼の入れ墨のある大きな体が、その黒服の仕立てのせいで、何年も年取って見えた。そして、生涯に亘って十分に給与を支払ってくれた国家と清算を済ませて、彼は司令部を出た。

門の所で、酔って帰営した若者たちが、騒々しい動きで情け容赦なく、もう見知らぬその民間人

を突き飛ばした。しかし、友人たちは、彼が一人立ち去るのを見て、最後の見送りをするために儀礼的に彼に追いついた。一緒に彼らは飲みに入って、順番に幸せな「年金生活者」の健康を祝した。彼は相変わらずとても嬉しく思っていて、そう言い続けた。街では、相変わらず若者たちが通っていく。司令部の門が大きく開けられたばかりなのだ。水兵たちを夜に放つ時間なのだ。女たちとの逢引きに向かいながら、彼らは声を張り上げて歌う。

．．．

子供たちよ、交互に摘み取れ  
激しい恋の日々と  
恋の夜々を。

その年、水兵たちの間で、はやっている歌だった。互いに見知らぬまま一団から一団へと、彼らはその歌を投げ返し、そして声を合わせてまた歌うのだった。歌は、古びた窓の花崗岩に肘をついて水兵たちが通るのを見る、その郊外の少女たちによって繰り返されさえするのだ。歌は、青白い顔やバラ色の顔のこの小娘たちによって歌われる。初めての快楽で隈のできた目をして娘たちは夕方、戸口の敷居に出て来て、ブルーカラーのセーラー服の恋人を待ち伏せるのだ。毎夜、その歌はこれらのくすんだ通りを満たす喜びの賛歌のようだ。

．．．

激しい恋の日々と  
恋の夜々を。

——見た？ あの爺さん、またよ！、と戸の後ろで恋人の橋楼員を待つずうずうしい女の子が言った。

．．．闇が降りると、彼は一人 prest の市門の外、ポルズィック街道にいた。西風が顔を打ち、海草の匂いを運んで来た。

日が暮れて彼は自宅の小さな庭の柵を開けて初めて寝ることになる彼の隠居所に入った。

暖炉の上の特別席には、永遠に彼の銀の呼び子が吊るしてあった．．．まるでこの夕べが彼にあらゆる物事の終わりを記したかののように、今、彼をとらえたその思いがけない憂鬱感は奇妙だった．．．彼の部屋はちゃんと片付けられていたけれど、それは彼がどうしてもその部屋がきれいに見える事にこだわったからだった。冒険や略奪で世界中から集めた、その老海賊の家を飾るいくつもの品物は、遠い国々を思い出させる不思議な感じに見えた。そして、ベッドのそばで、死んだ娘の肖像写真が、——その頃はまだまだあまり色あせていなかった——蠟燭を持ってぼんやりと見つめていた。

彼は両手でその貝殻の額をつかんだ、そして、この幸せな夕べに思わず心がくじけて初めての涙

が既に白くなったひげの所まで落ち始めた。彼は芯から本物のブルターニュの水夫だった、ところで海の上で暮らす表面は粗暴なこれらの男たちはいつでも心の底に、どこかの村の一隅や彼らが愛した誰かの小さな優しい顔立ちの唯一の消せない思い出を残しているものだ。

西風がドアの下から吹き込んだ。一人きりの彼の家の後ろでは西風が花崗岩とハリエニシダがはりだした湿った中庭に吹き込むのだった。——向こうの沖合では荒れた天気の違いなかったし、厳しい夜になりそうだった。しかし、彼はそれらの不安とは永遠におさらばしたのだ、それらの黒い不気味な夜、それらの荒れ狂う波の大きな音、寒さと不安で青ざめさせるそれらの海のあらゆる恐怖の種とはおさらばしたのだ。今や、すべてがうなり声をあげ、外で荒れ狂っているかもしれない。絶対に、絶対に、それはもう彼には関係ないのだ。何と自分は幸せなことだろう！もう、危険も、仕事も、苦労もないのだ。毎晩、夜じゅう本当のベッドで静かに眠る。小庭を耕す、——彼がずっと望んで来たまったく新しいことだ——、それから自分自身を大切にする。これだけ休息を取り、用心していけば、確実にまた幸せな年月を取り戻し、若返ることさえできるはずだ……

しかしながら、彼は相変わらず泣いた。最初は石の汗のようにゆっくりした涙が今、荒れた雨のように、より素早く急速に流れるのだった。

それから、彼を捉えたのは一体何だろう？……それはもう、単に亡き娘への哀惜ではなくて、本質的な深い悲嘆だった。——一日中感じていた大いなる満足は今や、最後のすすり泣きと、すぐに死んでしまいたい欲望になって消えた……

## 10

退役のその日の翌日、彼は朝早く目覚めて、あの静けさに捉えられ、家に自分一人であることに驚き、初めて、自分が最早ただの老人に過ぎないことが分かった。

そうして、彼にとってはあの終わりの人生が始まった、その人生には週毎に段々嫌な死の味がしみ込むのだ。彼は養生や休息にもかかわらず衰弱していった。その引退生活の突然の平穏の中で思いをこらすと、今こそ、海での四十年間の重たい疲労を感じ、遅すぎたけれども、取り返しのつかない衰弱を意識するのだった。

五年間のこの静かな生活の後に、老衰があまりに急速に進んだので、彼は旧友に再会しても、自分だと分かってもらうためにはほとんど、名前を言わざるをえないほどだった。

夜がとりわけ消耗させた。朝まで汗をかいたり、悪夢を見るのだ。頭が眠りのその不思議な作用とそれらの夢の中でゆっくりと空っぽになるみたいだった。目覚めると、腕や脚が痛んだ。若い頃、彼の筋肉をととても強力にしてくれた、あの体力を使い果たしてしまった後のようにくたくただった。しかし、反対のことが今日、体全体で起こっているのだ。夜のあの寝汗の間に、彼の四肢は縮んでいて、柔弱化した肉体の中で骨格が浮き出し始めていた。

いつも似たような場面が夢の中に現れるのだった。彼は自分が船の閉めきったどこかの倉庫の奥で、大荒れの夜、空気不足で簡易ベッドの上に寝ていると思っている。その時誰かが彼を迎えに来

て見張りの番であることと上では船が操縦されていることを思い出させた。任務をさぼってしまったことにいらだち、帆柱の中で起こっているかもしれないことを考えて恐ろしい不安に捉えられて、すぐに彼は服を着て走っていきたいと思う。しかし服も見当たらなければ、登っていくための出口も全く見つからずに、彼は途方にくれるのだ・・・あるいは、ちょうどその甲板まで着いてやるべき操作が分かったとしても今度は呼び子がもはや全く音を出してくれないし、腕にはもはや全く力が入らないのだ、そして彼は消耗する戦いの中で、長い間その奇妙な無気力相手に悪戦苦闘するのだ。ついに彼が汗でびしょりになって目覚めてみると、ドアの下から入ってくる西風や、屋根の上に降る冬の雨のいつもの音だけが聞こえるのだった。少しずつ、彼は思い出す、これらの海の場面は永遠に終わってしまったのだということを、そして彼自身が死の近い老人になってしまったのだということを。——そうするとそれは夢の不安よりももっと暗鬱な別の不安だった。

.....

彼には年金と十字架と投資したお金とともに、ちゃんと生活していける糧があった。

彼の生活の全ての細々したことは、船で老僕たちが身に付けるあの整頓の習慣によって毎日正確に果たされた。

彼は自分で食事の用意をしてベッドを整え部屋を片づけて、後ろの小さな庭で週に何日間か下着を洗った。

ボルズィックの老婦人でル・ガルバあさんと呼ばれている人が毎朝立ち寄って、彼のために市場に買い出しに行ってくれた。しかしながら彼のように水兵の仕事で家族を持たないままに終わった海軍の退役者たちだらけだった、——ボタン穴に赤や黄色の略綬をつけた老冒険家たちの傷跡のある顔とか老勇者たちの尊敬すべき顔——、ルクヴランスには腕に籠を下げて、毅然として、自分たちの一人暮らしの食料品を自ら買いに出かける人たちもいっぱいいた。確かにそれは恥づべきことではない。しかしその小さな籠や口論や駆け引きが彼は嫌だった。

しかしながら全ての水兵たちのように、彼は陸上の男たちが女たちに任せるそれらの仕事に慣れてきた。まだ気高い顔立ちを持つ大柄な老人である彼が自宅で、衣服を繕ったり、軍服のボタンを取り換えて民間服に仕立て直したり、かつて驚異的な力仕事をこなした入れ墨の入ったごつごつした手で素早く縫い物をするのが見られるのだった。

彼の小さな花壇では花がうまく咲いていた、そしてそれが彼の期待を裏切ることのない最後の楽しみだった。

船舶の帰港、水兵たちが夜通りで立てる騒ぎや遠くで聞こえる彼らの歌、しかしながら彼は何年も前から加わるのをやめていた若者たちのそれら全てのお祭り騒ぎは、今では一種の辛い回想となって、ベッドで眠れずにいる彼を動揺させるのだった。彼が起き上がり、窓を開けて真夜中の風に耳を澄ますことがあった。風はハリエニシダやヒースを越えて彼に、ルクヴランスの喧騒を運んでくるのだった。

初めの頃、春もまた少し彼を悩ませた。しかしそれはより漠然とした憂鬱感で、思い出せないこ

との苦しみのようなものだった・・・あの五月の暖かな最初の何日間かが彼に極東アジア、彼が最も生きて、女たちに自分の生命を最も注ぎ込んだ国を再び思い出させるのだった。そして、鳥たちが歌うその露の夜の間に、黄色の女たちが時々彼を訪ねてきた。なかば控えめな彼女らは体にぴったりとしたチュニックを着て、中国風の気取りを見せて、向こうの彼女らの家でのように腰を揺らしながら、彼の前を歩いていく。その女たちはキノコの笠に似た無数のひだがある平たい日傘の下で振り向きながら、からかい好きの猫のようなほほ笑みを彼に投げかけるのだ。それは確かに彼がどこかで知りあった女たちだった、そのことは覚えていた。しかし女たちは彼に何を願うことができただろう？ 彼女らは消えてしまい、彼は彼女らを追いかける気遣いさえしなかった。

しかしながらある晩、彼は思い立って九時ごろに急いで服を着て、手に太いステッキを持ってまるで人に言えない場所を訪ねていく人みたいに顔を伏せ急ぎ足で歩きながら、プレストへと向かった。そこで、サン＝ティヴ通りの下で彼は再び美しい女たちを見かけた。その女たちは黄色でも無ければ、日傘も持っていない、怪物を刺繍してあるちりめんのスカートをはいてもいなかったけれど、下品なしわがれ声で卑猥なことをしゃべっていた。それで彼は消耗しきって恥ずかしい気持ちでそこから帰ってきた、そして、その晩以来彼は老年の羞恥心と尊厳を永遠に守り通した。

夏、彼は蔓のある植物を育て、屋根の低い彼の家の上にそれを這わせた。それらの植物は彼に熱帯の蔓植物を思い出させるのだった。ドアの前に小さなゆりかごを備えた、それはまるでベランダのようだった。一年のうちかなり暑くなるあの二・三日間に南京織りの服を着て棕櫚の葉っぱの扇子を持つのが彼の楽しみの一つだった、——彼の目がもはや決して見るできないに違いないあのエキゾチックな国々におけるように。

七月半ば、毎年、ポルズィックの向こうのサン＝タンヌ村で大パルドン祭が開かれて、その日は、陽気な群衆が支離滅裂な行列のように朝から晩まで通るのだけれど、水兵たちが圧倒的に多い。彼はそのパルドン祭のことをずっと前から考えていた、彼にとっては夏の極みを示すものなのだ。朝早くから、正装して、扇子を持ち、オウムを外に運び出して、彼は見物し見物されるために、門の前に座っていた。通りすがりに人々は、耳に金のイヤリングをして、小庭にいるその老人を相変わらず見つめていく。彼の中にはまだ微笑を誘うようなものは何もなかった。外見は堅苦しく厳しい。かつてはとても優しくなれて、そうしたすべてを変えてくれた彼の目も今はもう何も表してはいない。瞼が、消えて以後は無益になったランプの上に垂れるように、目の上に垂れていた。その顔の輪郭だけが唯一まだきっちりしていたけれど、時のせいで誇張され、硬直して、それで、彼は海賊の褐色のミイラそっくりだった。

それから、夜、その祭日が終わり、最後の行列団が通り過ぎると、一人だけになり、静寂が戻り、彼はより絶望的な悲しみに捉えられた。また夏が！・・・そして間もなく、冬が始まるのだ、雨と長い夜と苦悩とともに。また一夏が、他の多くの夏とともに、底なしの淵の中へと消え去り、消失していく！

今、彼に死にたい気持ちはもう全然なかった、ああ、絶対嫌だ。それには老い過ぎた。彼は、残された僅かの生に引き攀った手でしがみつकिながら、尚一層、養生した。



それでも、引き止めたいと願うその時間がそれほどまでに素早く逃げ去ったことはかつてなかった。時間は最早存在せず、日々、月々、季節季節が無に帰すもののように恐ろしいほど急速に静かに過ぎ去る、休みなく過ぎ去るかのようだった。

11

ある年、警告がもたらされて彼はとても不安になった。

夢の中で、ある夜、彼は一つ見えそうにないあの深い海の一つを通っていた。海の表面はとても静かで、まるで砂漠のように広大で灰色の一枚の大理石の板のようだった。夕暮れどきで、彼は船の前方で見張りに立っていた。足下には一人のアジア人の女が眠っていた、彼が知っているその女の名前はナン＝チュウとあって、彼はその女とかつて他の場所で知りあったことを思い出した。彼らは不安もなく音を立てることもなく、ゆったりと滑るように進んでいった。しかし突然、そのすぐ近くに、標識とか警報と呼ばれていて、水兵たちに海の下に隠れた目に見えない危険を知らせるものが不意に現れた。

現実生活においては真っ昼間に、彼は三十年前に同じような不意打ちにあったことがあった。その時彼は、土壌が泥で、人が住んでもいないし住むこともできない、船のいない海よりも単調で死んだような、緑の灌木に覆われた平原の中を何里にも渡って蛇行する、インドシナのあの川の一つでジャンクを操っているのだった。至る所に、熱帯低地帯の有毒な草木が、荒廃した大きな沼地の上に、目を欺くように見事に点在していた。どんよりとした空気、真昼の抵抗しがたい重苦しさに負けて、彼はあの恐ろしいほどに輝かしい光に相変わらず目を開けたままで、ほとんどどうとうとしていた。彼の近くで、カンボジア女のナン＝チュウが眠っていた、彼女はその当時彼の妻だったのだ。突然、狭い川の曲がり角に、標識が現れた。標識は三つが一緒になっていて、長いさおの端に三つの赤い三角形がのっけていて、「気をつけろ、静かな水の中には危険が隠れているぞ」と告げるかのよう立っていた。

サンゴ礁！——それは不思議な淘汰によって、イシサンゴ属が住み着こうと思った場所で、何世紀も前から、彼らはそこに無数の石の細胞を堆積してきたのだ。その航路全体で唯一の、そのサンゴ礁のことは予め言われてあったが、こんなに近くとは思っていなかったのだ、彼は怖くなったのだ。

それらの思い出はすでにはるか彼方、時空のはるか彼方となり、消え失せた過去の底に見えなくなってしまった！太陽と命の思い出を何が、冬の雨の夜、すでに空っぽの老いた頭の灰の中で掻き立てて、その老いぼれゆがんだ最後の幻を作ることができたのだろうか？

彼の夢のその灰色の海の中中に突然出現した標識は大変な数で、何か超自然的で言い表しえない危険を告げるかのよう集められていた。あらゆる類いの不思議で未知なる形をしていた。とても長い竿の先で、腕のように広がり、合図をして、叫び出したいのにできない無言の物たちの必死の無力のまま揺れ動き、ほのかな空に魔法の文字を描いていた。

そこで彼は、避けえない宿命的なものが近づいたかのように非常な恐怖に捉えられて、目覚めた。こんな風に前兆があった暗礁は、恐ろしいものになる。彼はそれが自分の死を意味しているのだと思った。

しかしながら、何も特別なことは起こらないまま一年が過ぎた。

ただ、彼の習慣に新たな変化が生じた。彼はとても食いしん坊になり、家政婦のあのル・ガル婆さんの市場での品選びが下手で、ちゃんとした美味しいものを買ってくれないと言って、絶えず不平をこぼした。その結果、ある日、彼自ら思い切って小籠を取った、——そして、その時から、彼が毎朝、ルクヴランスで、主婦のように彼もまたお店のおかみさん連中の周りで長々と値切っているのが見られるようになった。

水兵の古いピージャケットを——退役連中が死ぬときまで着て歩くあの持ちの良いラシャの服——身綺麗にきちんとブラシをかけて着て、彼はそれ相応の態度と姿勢で、まだかなり足早に出かけていくのだが、帰りはひどく息を切らせていた。

ある朝、彼のような別の退役水兵と飲むことを承知した結果、彼はもうまっすぐ歩けない状態に戻った。それで、人生で初めて恥ずかしいことに女性に、つまりはあのル・ガル婆さんに叱られたのだ。婆さんが不機嫌になるのは日曜の夜だけで、それもまだ毎週ではなかった。

今は彼もまた、——そして、それは死の前兆だった——穏やかな天気の日、ルクヴランス門の要塞近くに集まるあの退役連中に加わるようになった。海軍のすべての哀れな古いピージャケットがブラシをかけられ、繰り返しブラシをかけられ、裏返して仕立て直され、擦り切れてそこにおいて、骨張った背中、死にかけている人体を包んでいた。

彼らは一緒に円盤投げ遊び、コルク栓倒し遊び、船上と同じような遊びをして楽しむ、水兵生活のあの無邪気と子供っぽさを失わずにいるからなのだけれど、それも今、この老人たちの場合は悲痛だった。

あるいは、哀れな小グループで座り、自分たちの物語を語り合う。

——メルポメーヌ号に乗っていた時……

——わしは、セミラミス号乗船中で、三番目のリーフを扱う晩のこと、元帥に言われていたのさ、「ジェゼケル、おまえの番だ!……」

彼らは同時に語り、各自が自分だけのために話すのだった。それに、彼らが話題にするそれらの船舶はもはや存在しない。それに、伝説上の人物のように彼らの話の中に何度も出てくるその司令官たちは、ずっと前に死亡していないとしても、悲しげな亡霊に成り果ててしまっていた。その亡霊たちは勇敢と献身と名誉の見事な人生を終えた後で、ボタン穴に赤い略綬をつけた黒い服で、通りをゆっくりと進んでいくのだった。あるいは少し天気のいい日は小型馬車で運ばれていった。

あのルクヴランス門の近くで、何本かの小道が出ていて、雑草とか地衣類でいっぱいの花崗岩の大城壁に沿って、郊外の人に住まない場所へと深く入り込んでいた。恋人たちにとってとても好都合な、船員たちがその郊外の小娘たちを夜散歩に連れだすのにとっても好んでいた緑の小道。そしてちょうど、その老人たち全員がその道の入り口を選んでそこに集まり、その場所を墓地の広場のよ

うにしていた。習慣に引きずられて、彼らはいつもそこを哀れな人並みで埋めていた、——ある者たちは永遠のピージャケットのボタンをきっちりしめて小綺麗で堂々としている、他の者たちはみすぼらしく、アルコールでふ抜けのようになって、見るも痛ましい有り様だった。

ところで彼らはみんなかつては敏捷で力強かったのだ、——今は彼らに完全に死なせないだけの物を与えてくれる祖国に仕えた結果衰弱しきっているのだ。かつては彼らの中にとても善良で勇敢な者たちがいたので、この彼ら自身の残骸のような人たちもまだ、いずれにせよ、ほとんど神聖な尊敬すべき物だった。

かつての勇者たちの古い残骸、そのそばで若者たちがブルーのシャツの襟を大きくあけて、腕に恋人をかかえて、体を反らして通り過ぎていき、その雑草の小道を城壁の楡の木の下へと急ぎ足で入り込んでいく。

若者たちの前には、人生と海が大きく開かれている。彼らをあらゆる種類の幻影で呼び寄せながら。彼らは他の男たちの若さよりも活力に溢れた水兵の若さに満ちていて、それが同じように素早く衰えることを考えることもなく、彼らの仲間だったこの亡霊たちを見ることもなく、健康と力に夢中の子供たちのように陽気に通り過ぎていく。その老人たちが歩くのに杖の助けを借りて、頭をぐらぐらさせて家に帰り着く時間に、夜を過ごすのだ。

## 12

ある冬、彼は老人性の痙攣に完全に捉えられた。彼は触れる物を倒してしまい、小家で多くの物を壊した。

かつて赤道下で罹ったお月さま病にまた襲われたのだ。船医たちが夜盲症と呼ぶこの病気は、熱帯で目を上げて、野外で眠る水兵たちに起こる。陽が沈むとすぐに、彼は目が見えなくなり、最早盲人のように手探りでしか動こうとはしないのだった。

彼は意気消沈していき、ヴェールが彼の回りでどんなものの上にも織られていった。

頭にはほとんど観念がなくなっているにもかかわらず、彼には相変わらず頭がとても重たく感じられた。時々、夜、中国人の顔がまたやって来てベッドのそばでしかめ面をする。そうすると、彼は怒り出し、大いに暴れながら、——かの地で彼らと戦っていると思いついで、罵詈雑言を吐くのだ。

相変わらず蠟燭を持ってはいるけれど、冬ごとに色あせていく聖体拝領される娘の肖像写真を、彼はもう決して見るのがなかった、——同時に今では共同墓地に埋葬され身動きできなくなっている死んだ若い娘の遺骸は多くの遺骨の中で緑色に変わっていた。

彼は美味しいワインや強壯剤を買うためにたくさんお金を使った。しかし彼の足に傷ができた、それで、身綺麗にしたいと思うので、彼はたった一人、毎朝その小さな中庭で、傷を包むのに使われていた包帯類を洗うのだった。

彼の上半身はゆがんでしまった。彼はかつてよりもすごく小さくなったように見えた、それに肩

骨が浮き出していた。

一日中、彼は死んだような目をして、養生することと食べることを以外には何一つ考えなかった。彼の頭がものすごくはっきりするのは、夜の最後の時間がもたらしてくれる一種の休息の後で、相変わらず一人目覚めたときの朝だけだった。そうすると彼は、理解し思い出すじっと動かない目をして不気味に身動きしないままにいるのだ。

哀れな残骸、海が欲しがらなかった漂流物、誰にも涙を見てもらえない孤独な老人！なぜ彼は若い盛りにもっと早く死んでしまわなかったのか？・・・自由な動物たちはこんな風にぐずぐずしたりはしない。最後まで、動物たちはその姿形、その存在理由を保ったままだ。動物たちは生殖し、交尾する。人生の愚弄という長い老年が作られているのは人間だけなのだ。

13

次の春もまた、彼はその小さな庭に座り、痙攣は一層ひどく、一段と無力になっていた。

しかしながら彼の眠りにはもう、かつての不安な夢が現れることはなかった。それは単に空間と太陽の思い出だった。彼の前にある青い大きな虚空、あるいは海の深いかなたのように移り変わる広がりだった。そして前景にはいつも索具や帆柱の接近した何らかの細部、帆桁、帆あるいはシユラウドがくっきりと浮かび上がる。死にかけている彼の脳の奥には、檣楼トップで過ごした青春時代の最後のイメージが残ったのだ、あるいはおそらく、不思議な遺伝によって、それらのイメージははるか彼方から、彼のように水兵だった祖先たちから彼のもとに現れたのだ。

しかしながらもう終わりだった。彼はもう決して、海の青い光輝、無限の光輝を目にすることはできないのだ。彼も、彼の血から生まれたどんな息子も。彼は何一つ生き残るはずのない絶えた家柄なのだ。

彼は日が暮れるたびに、最後は一人で死んでいくことになると言って不安がるのだった。しかし、お金のために今では日中彼の家にいてくれるル・ガル婆さんは、噂されるからと言い張って、夜そこに泊まることは断った。

足の傷が大きく広がった、それで、彼は絶対に身綺麗でいたいと思って、丁寧に自分で包帯類を洗い続けた。しかし間違えて、何度も同じ水をかき回すことがあった。彼にはもうあまり分かっただけはおらず、毫碌して汚いことを行っているのだった。

五月に、彼はまた庭いじりを試みた、今では墓の側のように高い草が伸びて、見捨てられたようになっている小さな二つの花壇をとでも心配して。美しい五月になりそうだった。彼の家の屋根の下に巣を持つツバメたちが朝から恋の喜びを歌っていた。田園の至る所に、新しい草木の緑が濃くなり、花々が開いていた・・・他の人たちや若い全ての物にとっては楽しさ。彼にとっては、死の冷笑よりも不気味な、残酷な皮肉。

彼は行ったり来たりして、それらの雑草を引き抜くために苦勞して身をかがめた。古いつりうき草がブルターニュの温暖な気候のもとで一本の木になり、垂れ下がる枝で小道を覆っていた。上の

方はほとんど死んでも同然だったけれど、下は若い植物のように大量に花をつけていた。そして老人が通りすぎると、サンゴ色をしたそれら全ての花が彼の水兵用ピージャケットの擦り切れたラシャに触れて、黄色の花粉を大量に新鮮な埃のようにまき散らすのだった。——彼もまた、かつて、命の溢れ出る液を行き当たりばつりにまき散らしたのだ、——しかし人間は老いてしまうと木々のようにまた花開いたりはしない、だから人間の終わりは見るもぞっとする腐敗となるのだ。

夏がまた過ぎた、暑さで彼は少し元気になった。彼は最後に、南京織りの短コートを着て、棕櫚の葉っぱで自分をあおいだ。しかし冬になると、水で溢れているかのように見える一層ひどいむくみが生じた。それで彼は愚かにも自分をしっかり保ちたいという感慨だけにしがみついて、養生に養生を重ねた。ひょっとしたら、これだけ用心すればおそらく次の春まで生き延びることが出来るかもしれない……

いいや駄目だった。ある三月の夜、ブレストに向かって行って何人かの肺病患者の命を奪った死が通りかかり、立ち止まって彼をねじ曲げた。死は彼の口をゆがませ、目をひんむかせて、指を反り返らせ、ベッドで硬直したままの彼を残してまた進んでいった。彼はそのまま凝固したような姿のまま、最後に粉々になって塵になるまでそうしているはずだ。

14

翌朝、ル・ガル婆さんがやって来て、そんな状態にある彼を発見した。

「こりゃ大変！……爺さんがくたばってしまった！」

彼は水兵たちの手で運ばれた。それがほとんど全ての老水兵たちの願いであるように、彼の願いだったのだ。彼の十字勲章のおかげで、武装した水兵たちが直立不動で敬意を表した。

それは誠実で名誉なことだった。

後に長い間、ブレストの下町の古着屋のショーウィンドウに、南京織りの短コート、棕櫚の扇、そして貝殻の額に入った聖体拝領を受ける少女の写真を見ることが出来た。

※ 物語後半の翻訳の口述筆記を手伝ってくれたYさんに、この場を借りてお礼申し上げます。面白い体験でした。それから、当時、ぼくは二重の喪失（これについては話しましたよね）で心的憔悴自失状態にあったのでした。Yさんは口述筆記の合間のお喋りで、（それと意識しないままに）ぼくを慰撫してくれていたのです。傷口に注がれる魔法の香油のように、傷心に触れる天使の手のように、ピエール・ロチの耳に聞こえていたアジャデさんの甘く爽やかな言葉のように治癒効果がありました。そのことを特に感謝しています。